

# 子どもと家族と学校と

『私立高校一年生・ハヤト・不登校』

中島 弘美

CON カウンセリングオフィス中島

## 高校生や大学生の不登校

ハヤトは、高校一年生の男子。

高校一年生という年齢は、CON のカウンセリングにやってくる子どもたちの中で最も多い学年。どちらかというとなり男子生徒が多くそして高校中退数が一番多い年齢でもある。

今、ハヤトが抱えている問題は、不登校。学校に行くことができない。

小学生中学生に関心が集まりがちな不登校だが、当オフィスは高校生大学生の不登校相談を多く受けている。

特に高校生は、欠席日数が超過して留年になるかもしれないという事態に直面し家族とともに学校や病院からの紹介で相談にやってくる。

また、高校生だけでなく気がかりなのは大学生の不登校で、相談件数は増加傾向にある。

「大学生の不登校」は、あまり使われる言葉ではないので、妙な表現だと受け止められるかもしれないが、希望して入った大学にもかかわらず、学生が通うことができない状態にある。

朝起きられない、講義室に入れない、昼休みが過ごせない、グループ発表の打ち合わせでトラブルになった、サークル

活動の交友関係がうまくいかないなどで不適應状態になり、欠席をする。

このままでは単位を落としてしまう。別の大学を再受験しようかそれとも、再登校を考えてみようか、休学しようかとカウンセリングに訪れている。

もちろん大学生の場合は、摂食障害や過呼吸、不安神経症、対人緊張、うつ状態など、何かの症状を持っていることが多く、そのため通学が難しくなっている。大学の教員からするといわゆる精神的な問題をもっている学生ということになるのだが、大学受験をクリアすることはできても、通い続ける力がない学生たちだ。

そんなに無理して大学に通わなくても休んで治療に専念するべきとの考え方もあるがどうしても大学に通いたい気持ちを持っている。

大学にキャンパスワーカーなどが常駐していると、大学生への支援も手厚くなるのだが、まだまだワーカーがいる大学は少ない。

## 高校の不登校生徒支援

昨今、小中高生の不登校状態にある生徒に対しての理解が進み、学校にもよるのだが、たとえば私立高校などはその対

策がさまざまになされている。

ひとりひとりの生徒をどれだけ丁寧に  
対応できるかは、私立高校の特徴の一つ  
になっているのだろう。

大学進学も重視される一方で、できる  
だけ中退せずに、卒業することに重点が  
おかれている。

定期試験の点数が一定の基準に達して  
いなくても特別課題をこなすことや補講  
などで回復措置を準備して、単位を取得  
し、送り出している。

高校の教員がとても細やかな指導をす  
るため保護者としてはとても安心だ。だ  
が、不登校状態から元気をとりもどす前  
に、大学受験をする。大学に入学したら、  
あとはなんとかなるからまずは入学とい  
う考えから、学校に適應できない個人の  
課題や問題はあとまわしになっているの  
だ。

本人や家族からすれば、高校がうまく  
いってなくても大学入学へのルートは  
魅力的であり、自信にもつながるが、毎  
日講義に出席することができない状態の  
まま、入学することになっているのも否  
めない。大学でつまづいている学生は、  
かつて、不登校を経験していた場合が少  
なくないのも事実だ。

## 高校入学後に再び不登校

面接室のハヤトはぼっちゃりした体格  
のメガネ姿。ひとなつつこい表情をする  
かと思えば、かたくるしい表情にもなる。

一方、細身のジーンズがとてもよく似  
合う母は、歳の離れたきょうだいと見間  
違うぐらいだ。

仕事で忙しくしている父はシャツ姿が  
多くラフな服装。家族は自然に会話をし、  
ハヤトは面接室ではきはきとこたえる。

「一学期の中間テストは受けたけれど、  
あとは教室に行っていません」

中学二年生の時に不登校になった当時、  
何かの出来事がきっかけとなったわけ  
ではない。ずるずると休んでしまったと家  
族は思っている。それでも、中学三年生  
のときに、週二回の塾の個別指導で熱心  
に勉強し、高校受験を突破。本人はとて  
も喜び、もう大丈夫だと周りは思ってい  
た。

入学後、調子よく登校していたが五月  
半ばから息切れしたように遅刻や欠席が  
始まり、ついには連続して休んでしま  
うようになった。

友達ができないわけではないが、教室  
は生徒が多くて圧迫感があり、中学の  
ときにあまり出ていないので授業内容も  
わからず、だんだんと疲れていった。

今の状態についてハヤトは、「やっぱり  
高校中退はまずい」と自分では思ってい  
る。勉強好きではないこと、さぼり癖が  
あることを自覚し、家では、家族が病気  
のときには、食事を用意するなどこまめ  
に動くこともできるが、どうも学校での  
人間関係が得意ではないようだ。

どうしたいの？と言葉をかけると、ハ  
ヤトは、ゆっくりしたいという、早く長  
期休みになって、ゲームをしてマンガを  
読んで、音楽を聴いて、家で学校のこ  
とを気にせずに過ごしたいという。

学校のすすめで、現在、ハヤトは、教  
室に入りづらい生徒のために学校内に用  
意された別室スペース、相談室に通うこ  
とができるようになった。

「担任の先生がよく、連絡をくださっています。先生の支えもありますが、中学の時に比べると別室ではあるけれど登校しているのは成長していると思います」母はハヤトのゆるやかな変化を見守っている。

定期試験は受けられたが、毎日朝から夕方までの授業となると、長い時間は無理と言う。

「留年したくないって言っているけれど、卒業の後は、何か考えている？」

「あんまり考えていないけど、できれば大学に行きたい、できればけど」

ハヤトは、大学行きを希望していた。

これまで学校のことでも悩まされていた彼だが、大学進学を希望している。学校に行けなくても、大学には行きたいのだ。

ハヤトの在籍する高校では、不登校の子どもたちを支援するためにいろいろな制度がある。専任のスクールカウンセラーはいないが、経験豊かな教員が教育相談を担当している。学校全体に長期欠席生徒対策がとられていて、委員会が設置されていた。気がかりな生徒は不登校の会議で対応を検討している。

登校したいという希望があるにもかかわらず登校できない状態にある生徒が、カウンセリングや病院に通っていれば、不登校生徒の認定を受け、別室登校が許可され、出席扱いに認められる制度になっている。

ゆるいルールかもしれない。ただし不登校生徒と認定されると、別室登校は認められるが、一定以上の成績はつかない条件だ。

このルールに基づき、ハヤトの今後は教室に入れなくても別室に登校すれば、

出席扱いとされることになった。ただし、目標はあくまでも教室で授業を受けられること。その日数がオーバーすると単位取得はできず、原級留め置きつまり留年になることも確認できた。

高校入学後しばらくしてから不登校になったことで、家族の気持ちはさがり、また欠席かと、がっかりしている。長い期間にわたる不登校は親も子どももこれからどうなるのかという不安と、周囲からいろいろといわれて委縮しているような様子が見られた。

さてこれから家族をどう元気づけるかになる。

## 仕切り直し

不登校支援の制度を利用することで、ある程度の生活目標が決まってきた。まずは、別室でもかまわないので必ず登校すること。そのことを確認したうえで、改めてカウンセリングの仕切り直しとなる。

「ここまで、休む状態が続くとご家族にもさまざまな気持ちが生まれてくるでしょう。学校の不登校支援の制度の中で、できることをすすめながら、一方で、ハヤトくんの生活や行動を見なおしてみましよう」

これまでなんとかピンチを乗り越えてきたので、今回もなんとかなるとおもっているのではないかと、甘い考えがあるのではないかと、と厳しい意見が、両親から聞かれた。

ぎりぎりにならないと動けないのもハヤトの良くないところで、これまで夏休

みの宿題は始業式間際になってやっている。まじめに、コツコツ何かをすることができない。

両親が話しているとハヤトは否定せずに聞いている。

ハヤトは友達はあるけど、かなり気をつかっている可能性があること、調子が悪くなると長時間腹痛になることが特徴としてみられることがわかってきた。

人の言いなりになっていることを自覚していないかもしれないと、気がついたのは父だった。

「あいつ、いろんなことにNOとかわらないかもしれません。友達から誘われて断っているのを聞いたことないですから」

少しずつハヤト君像が浮かんできた。

「穏やかで、幼い感じがするのは、この子の特徴だと思っていたけれど、人に言えないことが多いかもしれません。口下手だし」

母も何かに気づいている。

学校に行かずに家で過ごしているときは、普通にしていると思っていたが、人とのコミュニケーションの仕方に注目していると、さらにハヤトの気持ちを理解することができた。

ハヤトは、別に無理をしているわけでもなく、我慢しているわけでもなくという様子に見えるが、自分の気持ちが何を望んでいて、どのような状態にあるかはわかっていないようだ。

「お前、友達がお金返してくれないと言っていたけれど、あれどうなった？もう返してもらったのか？」父がたずねると、「いいや、あれはもう返してもらわなくていいわ～」

もういいわ、とか、どっちでもいいとか、流してしまうような表現が多い。

両親がハヤトに注目すると少し戸惑っている。このような話題がただ面倒なのか、複雑な表情だ。

ハヤトは人づき合いの中で、断れないのではないかと両親は考えている。

他にも苦手なことがでて来るかもしれない。

「なんで返してくれっていわんのや？」

父が問いかける。

「えっそれは、かわいそうやし、どっちでもいいねん」

黙っていられなくなった父がハヤトに話す。

「お前みていたらイライラするわ。もっとはつきりせんか～」

「お父さんそんなにきつく言わなくてもいいじゃないの」

と母が助け舟を出す。

「わたしもハヤトに何かを頼むとあんまり断れられたことはないように思う、この子、気が良いのよ。」

家族がふたたび、ハヤトの今をなんとかしようと動き出している。

なんで不登校が続くのかと疲れ切っていた家族は、もう一度ハヤトの行動パターンを見直し、なんとかたくましくなってほしいという気持ちが出て、これまではただ甘えている、怠けているハヤトのイメージから、実は、人づき合いで困っているハヤトに気づくことで、両親が応援し始めた。